



〈前編〉

## ミャンマーの貧困緩和のために

今月号と次号でこのコーナーを担当する内山文香です。私は、助産師として病院や保健所、助産院で働いた後、ミャンマーに赴任し、地域保健に関連した仕事をしています。今回は、毎日の授業や実習で忙しい皆さんに、ちょっとした息抜きとなる話題提供ができればうれしいです。

### ● “国際協力”の仕事とは

皆さんは、“国際協力”の仕事についてどんなイメージをもっていますか？ 国際協力というと、一般的には紛争や災害後の緊急支援という印象が強いかもしれません。私もこの仕事に就いたきっかけは、あるテレビ番組で「国境なき医師団」から派遣された日本人産婦人科医が紛争地で働く様子を見たことでした。こうした緊急支援は世界中で行われています。たとえばミャンマーでは、2008年に大型のサイクロンが発生し、死者・行方不明者合わせて13万人以上の大災害となりました。その際、私が所属するAMDAも約6千人の被災者に対して医療活動を実施しました。このような支援は国際協力のなかでも緊急に支援を必要とする

“急性期”の仕事です。

一方で、“慢性期”に対する国際協力もあります。たとえば、貧困、紛争後の治安維持、失業、道路や病院の未整備など、短期では解決できない慢性的な課題を抱える地域もあります。私はこうした慢性的な問題を解決するため、特に健康にかかわる部分に関して活動しています。現地の保健行政とともに、2年から10年の中長期計画に従って、そこで暮らす人々がどうしたら貧困のスパイラルから抜け出し、より健康な生活を送ることができるかを考え、実行していくのが私の仕事です。

### ● “貧困”という負のスパイラル

ミャンマーの中部乾燥地帯では、ごまやたばこなどの乾燥に強い作物は育つものの、主食となる米のように雨季が必要な作物はなかなか育ちませ



← 乾季における中部乾燥地帯の典型的な様子。



コーディネーター すがなみ しげあき  
菅波 茂

1946年広島県生まれ。医師・博士（公衆衛生学）。1984年AMDA（特定非営利活動法人アムダ）を設立。アジアを中心とする医師のネットワークを活用して医療チームを編成し、これまでに難民や災害被災者への救援活動を50か国、120件実施。「日本の看護師は世界中どこに出しても恥ずかしくない」が持論。医療法人アスカ国際クリニックで診療を続ける傍ら、AMDA代表を務める。



干上がった耕作地。年間降水量は500mm前後のため稲作は困難。

# ナースたち

## 4人目のナース

AMDA社会開発機構業務調整員  
うちまふみ か  
内山文香



### profile

2004年から約4年間、助産師として国内の病院や診療所、助産院に勤務。2008年より特定非営利活動法人AMDA社会開発機構に入職。業務調整員として国内業務に携わった後、2009年8月ミャンマーへ赴任、現在は中央乾燥地帯における2つの保健関連事業を運営している。



白と赤の制服を着た、地域保健を担う助産師さんたち。

ん。そのため、小規模でやせた土地しかもたない零細農民の収入は不安定で、1日2食を食べていくのがやっとの状態です。ミャンマーでは、このような人々が人口の半数を占めています。

さらに彼らには、安全な水を飲む、子どもに教育を受けさせるなどの、先進国の人間が一般的に享受できるサービスを受けることが困難であったり、サービス自体がなかったりするので。

その結果、過労で体調を崩す、畑仕事でけがをし、高額な医療費を支払うために資産を売る、男女問わず道路や橋の建設の出稼ぎに行き大けがをして働けなくなる、といった危険と向かい合わせの生活を送ることを余儀なくされています。

### ● 病院での経験を活かして

私たちAMDAは、ミャンマーの貧困を緩和し、そこで暮らす人々の健康に貢献すべく日々活動しています。ミャンマー中央部のメティラ郡では、“マイクロクレジット事業”（担保が用意できない

人に小額のお金を融資し農業や畜産などに投資してもらい、収入を増やして返済してもらおう事業)を行い、パコク郡では、地域の医療従事者と協力して保健所建設や保健教育などを行っています。

そのなかで私は、“業務調整員”として、これらの事業が円滑に行われるよう、職員や関係者とともに、日程調整や予算管理、進捗管理、事業評価などを行っています。この仕事は、助産師とは全く異なりますが、実は病院での経験が役に立つことも多くあるのです。たとえば、お産が正常に進んでいるかを確認することは「進捗管理」に、産後の母子のケアや健診は「事業評価」にと、助産師の経験を活かすことができます。経験というものは何かしら活かすことができるのです。

次号は業務調整員の具体的な仕事内容と、そのなかで起こるさまざまな出来事について、いくつかのエピソードを交えながらお話ししますね。

(11月号に続く)



職員たちとAMDAパコク事務所にて。前列一番右が筆者。



〈後編〉

## 世界中の健康を願って

皆さんこんにちは。今回は、私が携わる国際協力の仕事、ミャンマーでの活動についてお話ししました。後編となる今回は、ミャンマーで経験した出来事、そして日本での国際協力についてお伝えしたいと思います。

### ● 貧困が生んだ“生活を守るための術”<sup>すべて</sup>

私たちが事業を行うミャンマーの村で、最近こんなことがありました。村人が援助団体から物を少しでも多くもらおうと、村の様子を実際より少し貧しくAMDAの職員に説明していました。さらに、「うちの村は本当に大変なんです……井戸でも保健所でも図書館でも、とにかく作ってください!」とお願いされたこともありました。

こういった場面に出くわすと、私は祖母を思い出します。祖母は確定申告に行くとき、ちょっと古い洋服を着て、お金があると思われぬように変装(?)していたことがあったとかなかったとか……。こういった行動が決してよいとはいえませんが、誰も生活がかかっていると必死になる気持ち、私もわかるなあと思います。

### ● 村人が自立するための支援を

事業を実施する際は、申請書の妥当性に依りて、外務省や助成団体から資金を提供してもらいます。しかし、予算や人材確保などさまざまな制約があり、すべてを一度に改善することはできません。“できる・できない”をはっきりさせ、村人自身の手でより多くの村の問題が解決できるよう、公平に資金を使えるよう配慮するのですが、そう簡単に進まないことがあります。

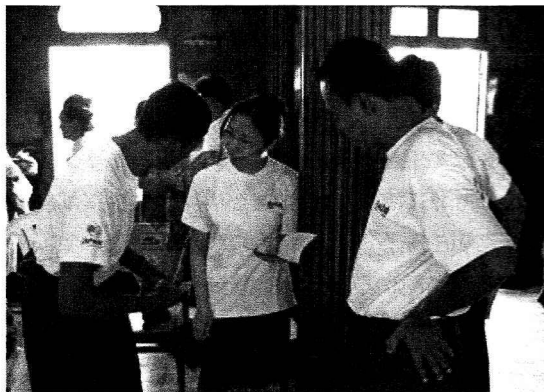
たとえば、村人は「公衆トイレを作ってください」と言いますが、トイレを使い慣れていない場合、狭い小屋で排泄するよりも茂みのほうがよいと感じる人もいます。その結果、結局使われず無駄になってしまうのです。そういった問題を解決に導くのが私たち業務調整員の仕事です。

看護師は患者さんが自分で生活をコントロールできるように一人ひとりに合った対応をしていきます。そう考えると、私たち業務調整員の仕事も看



コーディネーター <sup>すがなみ しげる</sup> 菅波 茂

1946年広島県生まれ。医師・博士(公衆衛生学)。1984年AMDA(特定非営利活動法人アムダ)を設立。アジアを中心とする医師のネットワークを活用して医療チームを編成し、これまでに難民や災害被災者への救援活動を50か国、120件実施。「日本の看護師は世界中どこに出しても恥ずかしくない」が特論。医療法人アスカ国際クリニックで診療を続ける傍ら、AMDA代表を務める。



「いい布があるよ!」と、自店の商品を売り込みに来る村人。

# ナースたち

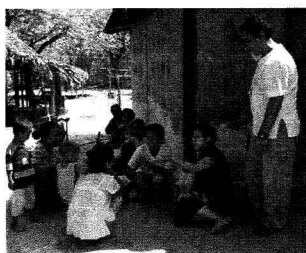
## 4人目のナース

AMDA社会開発機構業務調整員  
うちまふみか  
内山文香



### profile

2004年から約4年間、助産師として国内の病院や診療所、助産院に勤務。2008年より特定非営利活動法人AMDA社会開発機構に入職。業務調整員として国内業務に携わった後、2009年8月ミャンマーへ赴任、現在は中央乾燥地帯における2つの保健関連事業を運営している。



←「村の保健センターを利用していますか?」と、村人にインタビューする筆者。



“健康な村”を目指して意見を出し合う村人たち。

看護師の仕事と似ているように思います。患者さんが入院し続けることを望む看護師がいないように、村人にずっと自分たちの援助をあてにし続けて欲しいNGO職員はいません。その村に最も適した解決策を一緒に見つけ、村人自身の力で健康的な生活を継続していけるよう、私たちは村人とともに悩み、何度も相談をしながら、よりよい解決策を求めて日々の仕事に取り組んでいます。

## 世界にかかわることは誰にでもできる

ミャンマーでの話が続きましたが、海外に行かなくとも、日本で国際協力にかかわることもできます。たとえば、日本の株式会社であるフェリシモはメティラ郡でAMDAと協力して活動しています。フェリシモの商品を購入したお客さんが支払ったお金の一部がAMDAをとおしてミャン

マーで使われているのです。

この例以外にも、日本に住む外国人への医療支援、看護介護職への外国人労働者受け入れの問題など、日本国内においても看護職が国際協力にかかわることはできます。皆さんも興味があればぜひ活動してみてくださいね。

最後に、私の限られた経験をとおして今最も強く感じていることをお伝えしたいと思います。

日本でもミャンマーでも、紛争があってもなくても、親しい人たちと一緒に時々おいしいものを食べて、平和に暮らすことが、きっと人間の基本的欲求なのだろうと思います。

皆さんも看護学生や看護師として、今後出会う人たちにポジティブな影響を与え、皆さん自身が楽しく平和に暮らしてください。そういった一人ひとりの幸福が、巡り巡って日本も含めた世界の人々の健康向上につながってほしいと、私はミャンマーから願っています。（おわり）



健康な村について考える「住民ワークショップ」を見に来た子どもたち。